

郷土を知り、郷土を愛する

志木市 歴史とんぼ

— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 —

第31回 せきね のぶお いけだ かめ 関根 伸夫・池田 要の作品

装い新たになった市庁舎、バス停からの眺めはまるでゲレンデのスロープのようで、さまざまなイベントに使いそうです。

そのグランドテラスの入口左角、左近の桜ならぬ位置にある近代モニュメントは「空相」と呼ばれ、1972年以来、旧庁舎時からその場所でそのままの形で庁舎を守るように建てられています。

空相は、現代環境美術家である関根伸夫の作品で、重さ3トン(一説には20トン)の三波石(長瀨産)を鏡面ステンレスの角柱が支えているT字型構造となっています。柱には周りの景色が映りこみ、まるで宙に浮いているかのようなのです。

作者の関根伸夫は埼玉県大宮市で生まれ、志木小学校、志木中学校、川越高校、多摩美

術大学へと進学し、もの派(公共空間を活性化させるアート)と呼ばれる、自然界のものをそのまま利用し表現する美術家として注目を集めました。空相の発想と作品としての表現が美術界をはじめ、見る人に衝撃を与え、世界的な美術家となりました。空相は、デンマークのコペンハーゲン美術館、イタリアのミラノ美術館、美ヶ原高原(箱根・彫刻の森美術館より移設)、一宮市民会館、志木市役所と世界に5つあり、今後も志木の未来を正しく空相してほしいと願うばかりです。

関根伸夫はそのほかにも、志木駅前ペDESTリアンデッキ上にある鏡面仕上げで東屋のような形をした「四季の殿堂」(志木市章を立体化したもの)や二基のエレベーター上にある花や雲の作品を手がけており、志木市を訪れる人々に好印象を与えています。

また、ペDESTリアンデッキ上にある67枚の切り絵は、関根伸夫の叔父にあたる池田要の作品です。



▲空相



▲四季の殿堂と切り絵



▲花の作品



ありがとう、市民会館

これまで市民の文化・芸術の拠点として使命を果たしてきた市民会館は、令和5年3月末をもって、45年の歴史に幕を下ろしました。

その歴史を振り返りますと、文化団体の発表や商工の活動の場としてはもちろん、テレビの公開録画や音楽アーティストのリハーサルにも利用され、さまざまな著名人が訪れました。市民会館のこけら落とし公演では故・島倉千代子氏、また、テレビ番組「痛快なりゆき番組 風雲! たけし城」の公開録画ではビートたけし氏、近年ではテレビ番組「笑点」でも活躍される春風亭一之輔氏の落語公演なども行われ、多くの市民に笑顔と感動を与えました。

さらには、市民会館を管理する志木市文化スポーツ振興公社の公式キャラクターであり、志木市の広報大使や健康大使としても活躍するカパルを中心に、たくさんの「ゆるキャラ®」が集結したイベントには、市内外問わず多くのファンが訪れ、いつしかファンの間では聖地として注目を集めました。

たくさんの思い出とともに、志木市の文化振興を長き

にわたり支えてくれた市民会館は令和5年度に解体となりますが、その前に、“はなむけ”となるイベントを令和5年4月16日に開催します。開催にあたっては、「ありがとう!市民会館」と銘打ち、これまで市民会館を拠点として活動してきた文化団体をはじめ、多くの市民の皆さんとともに、これまでの思い出を振り返りながら、記憶に残るイベントとすることで、市民会館と市民体育館の機能をあわせもった新複合施設へバトンを渡します。

新複合施設については、新たな市民の集いの場、そして、にぎわい創出の場として市民力を育む施設を目指し、これまで整備手法や財源確保などについて、市議会特別委員会での審議や、学識者や両施設の利用団体などで構成される検討委員会での議論を重ね、市民会館用地での複合化に向けた基本計画を令和3年8月に策定しました。また、令和4年10月に完了した基本設計では、より市民の意見を設計のコンセプトに反映させるため、利用団体からのヒアリングのほか、基本計画策定に携わられた検討委員会の委員に加え、商工会や公募による市民、さらには市内の高校生など、幅広い年代の方々を交えた市民ワークショップを開催しました。

現在は、各施設を利用されている方や障がいのある方など、さまざまな声を引き続き丁寧に聞きながら、より詳細な実施設計を鋭意進めているところであり、令和5年度においては、この実施設計を完了させるとともに、駐車台数のさらなる確保に向け、市民会館近隣地に新たな駐車場の整備も進めます。新庁舎建設に続く一大プロジェクトとして、「みんなに愛され、誰もが主役になれる」新たな複合施設を目指して、いよいよ本格的に始動していきます。